

## 1、ぽっくり寺で放生会

わが家から歩いて100m余りの吉田寺(きちでんじ)で9/1に放生会が行われた。午前中は「腰から下の世話をせず、ぽっくり往生できる」という大阿弥陀仏への祈願法要で、押しかけた参詣人へのご祈祷があり、抹茶などが振る舞われた。

午後は大池周辺での放生会だが「鳩逃がし」の異名があって、子供たちが持ち寄った鳩などの鳥類が逃がされ、池へは土地柄もあって金魚が放たれた……。と家内からの報告。

この寺はいつも祈願に来る人が多く、駐車場も込み合っているが、その向きでご心配な方はぜひお出掛けください。 “百日紅 咲き継ぐ寺のポケ封じ”

「お前は大丈夫か？」 エエ私はマア何とかだが、実はこの日には下記の用事で出掛けておりました……

## 2、心豊かな田舎葬儀

私の従兄弟では最長老の満92歳の女性が亡くなった知らせを受け、本家がある岡山の葬儀に参列してきた。新幹線を使っても奈良から4時間強の田舎である。

近年、葬儀は簡素化の傾向にあり「故人の意志により家族葬」というのが増えてきたと思われるが、今回は「故人の意志により昔ながらの自宅葬」で、私の祖父が明治初期に建てたという古い農家を、数年前に改造した家が今回の斎場である。

- ① 9:30 菩提寺の永案寺和尚が到着。すぐに塔婆などへの墨書が始まる。故人は以前に受戒会を受けてあったらしく、本人も承知の戒名が記される。
- ② 10:00 葬儀開始。天台宗なので私には馴染みのない経文や陀羅尼・真言などが続く。鈴鉦と鑊鉢という簡素な鳴り物で、引導渡しなどもない。全員による焼香。
- ③ 11:15 棺が閉じられて出棺。係により読み上げられる参列者全員の役割があり、喪主が位牌を持つことから始まり、花持ちまで昔の『野辺送り』と同じように役配がある。以前は土葬だったから、家から数百mほど山へ登って行ったはずである。そこには大きな影山墓苑があり、私の父の遺骨も一時期はそこに埋められていた。役配表は和綴じの立派なもので、葬儀後も重要物件として残されるから、今でも私の祖父や祖母の葬儀の役割が判り、当時の様子を知ることができる。昔の私の父の役は、祖父の葬儀では棺担ぎ役だが、祖母の時には役割がない。その理由は、当時の父は北海道根室に勤務しており、葬儀に間に合わなかったためである。
- ④ 今回はバスで火葬場着。12:00 僧侶の読経の中を全員で焼香。また元の家へ逆戻って収骨までの食事をする。仕出し屋が造った三段重ねの立派な食事を頂きながら、親類同士、ご無沙汰の会話を交わす。しばらくして親族のみで収骨に行き、帰宅した遺骨が正面に安置されて僧侶の読経。喪主の挨拶が行われた。僧侶も喪主も喪主の妻も大変。忙しい現代では、35日忌や49日忌は葬儀の日にとまとめて行う例が多いが、ここでは初七日から七七日忌まで手を抜かずに毎週、読経を行うという。なかなか町中では見られなくなった心豊かな田舎葬儀であった。15:00 終了。

### 3、南部奈良は大水害

台風12号が紀伊半島に大きな被害をもたらした。東北の震災といい、今回の被害といい、アジア大陸の淵に弧を描く日本列島が、災害の防波堤になっているような気がする。

それにしても、ここでも道路事情の悪さが救出に足かせとなっているらしい。新聞によると、かねてから村民たちが『道は村のライフライン』と改善を要請していたという。

新任の前田国交大臣は奈良選出だそうで、ヘリを使って早速に十津川村の現地に入ったが、長年の懸案に大きくナタを振って貰わねばならない。

それにしても被害が大きすぎる。世界文化遺産もかなりやられたらしい。土砂による堰止め湖も不気味。若い英語教師が殉職。狩野川台風で殉職した同級生が思い出される。

私は新聞で見るだけだが、ある奈良選出議員の新総理選出での露骨な権力志向の行動。県議会議長選では金銭供応を含む贈賄工作など、何かどこかで違ってきている。

道路の安全と近代化については、これまでも感想めいて拙稿で記してきたが、水害を機に一刻も早い改善が望まれる。道路の安全は「観光立県」の前提条件だと思われる。

新聞時事川柳より “月光の曲 せきとめ湖では奏せない”

### 4、40回目の浜松リコーダー・コンテスト

標題のリコーダー・コンテストに今年も参加してきた。私はこの会の最初から関わって来たから、40回と聞くと感慨も深く、様々な昔の光景や先輩友人の顔が浮かんで来る。

今回、集った人の中では私ともう一人が一番古く、以前の方はほとんどが亡くなっているので、過去の記録の保存のことも話題になったが「どこかにあると思う」「今のうちなら集められる」程度で終わって、窮迫することだと思うが話は進まない。

それというのも、今年はコンテストへの応募者が少なく、八月の予選から先行きが心配されていて、小中学校音楽現場が極めて憂慮すべき状態にあることが伺えるからである。

ことはコンテストへの参加者数から始まったが、リコーダーの技量の低下から、それを支える音楽学習の質の問題、或いは音楽担当教師の研修や育成のこと。一方で父母の悩みや訴えも多く、学校や教師がそれに振り回され、駆け巡らされて自主研修など考える余地がない等々、現場の悩みの数々。

古参の二人で生涯学習(楽習)からの援助活動なども話し合う。戦争が終わって60数年。学校唱歌が音楽学習となり、より本物の音楽を目指した活動が展開され、浜松のコンテストが40年で果たした成果も多いはず。当時、10代で参加し人も今では50歳以上。まだ老け込む年齢ではないはず。そうした人達と共にもう一息、頑張りましょうか。

### 5、来年は『古事記』が編纂されて1300年 奈良新聞：和田萃氏の文から

近鉄電車、橿原線の新口駅と笠縫駅の中程に差し掛かると、いつも東の三輪山を見、振り返って西の二上山を望む。造化の神の妙なる手業かと思うほど、東の三輪山と西の二上山はほぼ正確に真東西に位置し、多(おほ)神社もその線上にある。二上山に夕陽が沈む頃、大和国原は紅に染まり、大和に住む人々にとって、至福の一時とあってよい。和銅五年、『古事記』を献上した太朝臣安万侶(おほのあそむすまろ)は大宇陀大豪族太(多)氏の出身である。

## 6、奈良には**中秋の名月**がよく似合う

- ① 猿沢池＝竜頭飾りをつけた船に雅楽の管弦楽団を乗せて古代の音楽を楽しむ。希望者には同様な船が用意されているが、私が覗いたら満席でした。『うねめ祭り』
- ② 唐招提寺では夕方から境内が解放されて無料となる。夜の法要に参加し、天平の薨と共に名月観賞ができる。
- ③ 三松寺＝普段から厳しい『禅』の寺。まずは座禅で心を落ち着け、尺八音楽を心の奥底に響かせる。目を瞑って月の光を取り入れる。
- ④ 慈光院＝石州流本元の茶席。大きく取り入れられた大和平野に浮かぶ名月の鑑賞。
- ⑤ 松尾寺＝月の出まえから「大正琴」の演奏会。大般若経の転読。黙想会など。
- ⑥ 大神神社＝昼間は野点の茶会。夜は巫女の神楽踊りや雅楽音楽会。
- ⑦ 明日香で月を見る会＝近鉄飛鳥駅から石舞台までいろんな話を聞きながら散歩。
- ⑧ 「お前は？」「私は竜田川河畔から観月。雲の間や月に並んで救助ヘリ」

## 7、「せんとくんプレミアム商品券」を今年も販売する。

1万円で1万1500円の買い物ができるプレミアム商品券が今年も販売される。奈良県内の商店で来年2月29日まで使えるので、その時期に奈良へ来る人には便利かも。

問合せ＝奈良県プレミアム商品券コールセンター 0742-21-6101

## 8、奈良漬について

文字通り奈良漬は奈良の名産品だが、「甘」「辛」「渋」「苦」の四つの味がバランス良く味わえるように製作される苦勞の結晶品だそうである。

歴史的には室町時代に清酒が奈良東部の正暦寺で醸されるようになり、酒粕に野菜を漬け込んだのが原型といわれる。平城宮跡の長屋王邸跡から出土した木簡にも「粕漬瓜」と記されたものがあり、古くから野菜漬けが賞味されていたと思われる。

以前のは強烈な麴の匂いがして「八百屋の前を通っただけで酔う」などと酒が飲めない言い訳をする人がいたものだが、今では近鉄奈良駅近くの大きな奈良漬物店へ行ってもさほどに感じないし、それを理由にする話も聞かない。

平城宮跡の長屋王邸跡には大きなショッピングモールが建っていて、その一角に出土地点を示す記念碑がある。奈良漬にも季節があるのだろうが、秋にも似合っている。

## 9、新聞の読者文芸から

ゴンドラに乗りたる僧や お身拭い	千手仏 座ってないで踊りゃんせ
夏草が宮址の空を低うせり	古代蓮 咲くや 耳成従えて
春日野のフォルンの音に鹿勇む	奥山に 早くも始まる落とし水
参道の夜店に 鹿も寄り来る	一村を鳴きて揺すぶるホトトギス
盆の月 何も話さぬ母が居て	元首相 増えてリーダー居なくなり

## 10、 またも見ました大人の喧嘩

所はスーパー・マーケット。兩人とも70歳台の男性。推測による喧嘩の理由は、甲が買物車を押して、乙の足を轢いたことらしい。互いに車を押した道、轢かれた場所を言い合っているが、次第に自己の正当性よりもお互いの人格攻撃となり。店内に響き渡る悪口雑言で相手を罵倒し、引く気はない。私は何事かとついつい近くへ行っただが、他の人は知らん顔で喧嘩慣れかな？ 当人たちも怒鳴りながら左右に別れてお引き取り。

町中でも、ブレーキより警笛乱発でスピード違反をする車が多いが、マーケット内でも「どいて！どいて！」と他人を蹴散らして買物車を押す人が多い。「片付ける人が居る」と籠も車もそのまま放置し、ビニール袋など只の物は余分取る。こういう人は「ありがとう」が言えない。ましてや「ごめんなさい」とは口が裂けても言わないだろう。

## 11、 日中友好活動について

静岡県が中国浙江省と提携を結び、交流活動を開始して相当な年月が経つと思うが、このほど、奈良県が中国陝西省と友好提携 を結ぶことになった。奈良市は中国の古都西安市と姉妹提携をしていると聞いていたので、今回の発表は「今頃？」という感じもあったが、正式に県が省と友好提携を締結したとのことで喜ばしいことである。

新聞には「両県省間の友好交流と経済貿易交流を促進し、科学・文化・観光・体育・教育・文化財保護・環境保護などの分野において、積極的に交流と協力をする」となっていて、大変に結構なことだが、官や公が大きな道を開くとするなら、実際に心の通う友好は民間が頑張らねばならぬと考える。

『友好提携』という言葉の響きは美しいが、実際はなかなか難しいことで、経済貿易交流のように互いが互いのものを必要としている場合は、極めて順調に友好提携が行われたようにみえるが、『職による縁』は「金の切れ目が縁の切れ目」「行事が終われば元の木阿弥」ということもある。これに比べると科学・文化・教育などの『学びの縁』は比較的長続きする。しかし、これとても縁が薄くなれば終わりとなりやすい。

「国際友好交流」の一つの物差しとして「あなたには何人の外国人の友人がいますか」という問いがある。「私は貿易の仕事をしている」と言っても、親しい外国人の友人がいなければ「国際友好活動」はゼロと算定するであろう。「年末に年賀状やクリスマス・カードをどのくらい外国人に送りますか？ どのくらい受け取りますか？」というのも同様な質問で「友好活動とは縁と縁の結び合い」である。

**縁結びには言葉が大切**になるから「中国との友好交流」には中国語が欠かせられない。流暢でなくてよいが、縁結びをする姿や内容を知らせあう必要があり、中国語の勉強は、心を通わせる友好をする上で、民間が頑張らねばならぬ第一のものと思われる。機会を見つけて中国人に話しかけ、中国語に慣れたい。